

福祉用具体験学習パンフレット

『福祉用具を体験しよう』

指導要領




財団法人テクノエイド協会
The Association for Technical Aids(ATA)



目次

本パンフレットの基本的な考え方について	2
1. はじめに (パンフレット参照)	3
2. 立ち上がれない・歩けない体験と福祉用具 ..	3
① [立ち上がることを体験しよう]	3
② [ベッドからの立ち上がりを体験しよう]	4
③ [歩けないことを体験しよう]	6
④ [車いすを体験しよう]	7
⑤ [車いすを体験しよう：上級編]	8
3. 目が見えない体験と福祉用具	11
① [目が見えないことを体験しよう]	11
② [白杖を体験しよう]	12
③ [その他の福祉用具を体験しよう]	14
参考文献	16
協力	
4. 「コミュニケーションが取れない体験と 福祉用具」	17
① [コミュニケーションが 取れないことを体験しよう]	17
② [文字盤の体験をしよう]	18
5. [手・腕が動かない体験と福祉用具・製作] ...	20
① [はしが使いづらくなる体験をしよう]	20
② [食事用の自助具を体験しよう]	21
③ [簡単な自助具の製作体験] ～リーチャーを作ってみよう～	22
④ [簡単な自助具の製作体験] ～便利なタオルを作ってみよう～	22
6. 福祉用具いろいろ (パンフレット参照).....	23
まとめ (パンフレット参照).....	23



本パンフレットの 基本的な考え方について

①障害を理解する

- ・加齢・疾病などによる身体機能の障害・低下などの状態を理解する。
- ・誰でもが「可能性」（障害をもつ可能性、障害をもっても普通の生き方ができる可能性）を持っていることを理解する。

②なじませる

- ・福祉用具は道具である。
- ・生活の中にあれば便利、なければとても不便。
- ・私たちの生活の中にある一般的な道具と何ら変わるところはない。
- ・一般的な道具との差異は「なじんでいる」か「いないか」。
- ・体験を通じて福祉用具とはこんなものという体験をさせる。

この経験が福祉用具を使用している人たちへの理解につながり、遠い将来において自分が使用するときの心理的障壁を低くできる。

③できないことができるようになる

加齢により、障害により、生活の中にできないことが生じた場合、福祉用具を利用することによって「できないこと」（他人にやってもらうこと）が「できること」（自分でやれる）に変化することを体験させる。

福祉用具が人の身体の機能の代わりをするということを体験させる。

④不便さを理解する

人の体の機能の代わりをするものが福祉用具だとすれば、当然不便さもつきまとう。

もし自分が利用者であれば何が大変であるかを理解する。できないことが生じた場合、どうすれば解決できるかを考える。

ただし、それが直ちに支援・介助・援助が必要だとは限らないことを理解させる。

これらの体験を通じて、福祉用具に対する「違和感」（「変なもの」、「特殊なもの」など）をなくし、障害をもつものも持たないものも同等に生活していけること、社会の中で一緒に生活することが当然であることを理解する。

以上のような視点で、福祉用具の体験学習を組み立てる。

1. はじめに (パンフレット参照)

2. 立ち上がれない・歩けない体験と福祉用具

「歩く」という動作は、たくさんの動きができて初めてできる動作です。

「歩くためには」まず、「立ち上がる」ことが重要になってきます。

下肢に障害がある方でも、立つことができれば、様々な福祉用具を使い「歩く」若しくは「移動する」ことが可能になってきます。

ここでは、「立ち上がる」動作をもう一度考えてもらうことと、そのときのポイントを見つけてもらい、どのような道具を使うことで、自分で立つことができるようになるか考えてもらうことを目的とします。

そのために、「立ち上がる」ということはどういう動きか体感してみましょう。

しかし、結論として、障害があると不便だということで結論づけるのではなく、道具を使うことで、便利になることを理解していただければと考えています。

①【立ち上がることを体験しよう】

1) 目的

前段参照

2) 準備する教材

特になし

3) 手順

①身長がほぼ同じグループ（二人一組のペア）を構成してもらう。

②一人が床から寝ている状態（仰向け）でどのように立ち上がるか、グループで観察します。

③次に、同じようにできるだけゆっくりと楽に立ち上がってもらいどのように違うかを観察します。ポイントと思われるところを記録して、どこに力を使ったか、実演者に発表してもらう。

4) 想定される動き

- ・膝を立てる。
- ・首を向く方向に向ける。

- ・膝を倒しながら、横を向く（側臥位^{そくがい}）
- ・手をついて、上半身を起こしてきながら、四つ這いになる。
- ・膝から、足に重心を移すように、手を手前についてくる。
- ・膝を伸ばしながら膝の上に手を置いて、手で上半身を起こして立ち上がる。

5) 実行する際の留意点

- ①立ち上がりで転倒しないように注意する。
- ②以下の点を気づいてもらう
 - *立ち上がるために、人はどのように身体を動かすのか。（頭の位置）
 - *足の位置も重要なポイントとなる。（洋式トイレの足の位置）
 - *日本人の生活様式を考える。（布団とベッドの違い）
ただし、布団の生活が悪いということではないということ十分に理解してもらいたい。

6) ポイント

普段何気なく行っている立ち上がる動作も、重心の安定、身体の動かし方を、ゆっくり行うことで再確認することができます。これらを知ること、どのように動くと、立ち上がりやすいかを理解してもらえればと思います。

また、道具を使用することで、さらに、楽に立ち上がることができることを体験してもらい、道具の有効性に気づいてもらえればと考えています。

● パンフレットP5 ⇒

7) 質問 [考えてみましょう！話し合ってみましょう！]

- ・このとき、どこに一番力が必要だったか、グループで話し合ってもらおう。
- ・どうすれば、楽に立ち上がることができるか話し合ってもらおう。
- ・立つ力が弱くなったとき、普段の生活を考えて、必要なことを考えてみる。

● パンフレットP6 ⇒

② [ベッドからの立ち上がりを体験しよう]

1) 目的

「立ち上がりが困難」になったときに使う福祉用具としてベッドを利用します。立ち上がるためには高さが大切であることを体験してもらうとともに、他にどのようなものがあると便利か理解してもらうことを目的とします。

2) 準備する教材

- ・介護用ベッド（低床型ベッドが望ましい。ベッド自体の高さが昇降するハイロー機能付）
- ・メジャー
- ・パイプ・イス
- ・机
- ・ひも

3) 手順

- ①ベッドを一番低い状態にしておく。
- ②身長がほぼ同じグループ（二人一組のペア）を構成してもらう。
- ③二人組になり、低い位置のベッドからゆっくり楽に立ち上がってもらう。その際、一人はその動きを観察してもらい事前に体験した動きと同じかどうか確認してもらう。
- ④高さを上げて、楽に立つことができるかどうか体験してもらう。
- ⑤自分に合った高さは、何cmか確認してもらう。
- ⑥ベッドの高さ以外に、何があると楽に立つことができるか考えてみる。
- ⑦どこにどのようなものがあると楽に立つことができるか試してみる。
- ⑧普段の生活の中で、どこに、ベッドのハイロー機能のようなものがあると便利か考えてみよう。
- ⑨高さの違いで、立ち上がりのしやすさを考えてみる。

4) 想定される動き

- ・ベッドの両側に、二人ずつ（計4人）座っておこなう。
- ・低い位置での立ち上がりを体験することで、重心の移動と、頭の動きを再度観察してもらう。

5) ポイント

- ・ベッド使用前には、腕力を使って楽に立ち上がれることが議論としてあげられるが、ベッドの高さを変えて、重心を高くすることで、楽に立ち上がることができることを体験する。
- ・立ち座りは生活の中でたくさん行われている。そのような場面を発案させ、立ち上がりの動きと高さ、足の位置の有効性を再度確認してもらう。

1) 目的

「歩けない」ということはどういうことでしょうか。「歩けない」ことで、もどかしさ、不便さ、を感じることもありますが、歩けなくても道具を使うことでできることを、考えてもらうことを目的とします。

2) 準備する教材

- ①足を縛るはちまき（タオルなどで代用）
- ②イス

3) 手順

- ①5人くらいでグループを構成します。
- ②一人が足を縛って歩けないようにします。
（立つことはできますが、歩くことはできません。）
- ③イスを5メートルくらい離して2つ置きます。
- ④イスのAからBに移動をしてもらいます。
（飛び跳ねて移動してはいけません。）
- ⑤どのような方法があるか考えてみましょう。

4) 想定される動き

- ①1人で移動してみる。
 - ・シャクトリ虫のように移動する。
 - ・腹ばいで移動する。
 - ・お尻で移動する。
 - ・イスを歩行車のようにして移動する
- ②数人で移動してみる。
 - ・対象者を抱えて運ぶ
 - ・おぶって運ぶ
 - ・イスごと移動する

5) 実行する際の留意点

- ①手や膝をついて移動することがあるため、危険や、衛生面に注意する。

6) 質問 [考えてみよう！ 話し合ってみよう！]

- ①どのような道具を使うと、楽に移動することができるかグループで考えてもらう。

②グループ発言から、考えを整理していく。

- (ア) 自分で移動する方法を選んだグループ
足が動かなくても、できることがあることを強調する。
- (イ) イスを歩行車のように使用方法を選んだグループ
道具を使うことで、楽に移動することができる。
- (ウ) グループの方に、運んでもらう方法を選んだグループ
対象者に感想を発言してもらおう。どのように感じたか。
楽と発言があった場合には、自分の気持ちを発言してもらおう。
例 トイレ、入浴等の場合どうするか？
介護は、自分の意志どおりにはならないことに気づいてもらえればよい

④【車いすを体験しよう】

1) 目的

「歩けない」状態により使う福祉用具は車いすだけではなく、車いすを使うことで、どのようなことができるのか、どのような不便さがあるのかを実際に体験してもらおうとともに、自分に何ができるか理解してもらおうことを目的とします。

2) 準備する教材

- ①車いす（標準型 調整機能付き型・できれば身体にあったもの）
- ②クッション
- ③障害物や段差になるもの（スロープ、運動マット、コーンなど）

3) 手順

- ① [車いすをこぐ：平面]
 - (ア) 二人一組のペアでグループを作る。(途中で交代する)
 - (イ) 希望の車いすを選ぶ。
 - (ウ) タイヤの空気圧を確認する。
 - (エ) ブレーキが利くか確認する。
 - (オ) 1人がイスから車いすに座る。
 - ・ブレーキを確認する
 - ・ステップをあげる。
 - ・車いすに座る
 - (カ) コースを造る
 - (キ) 自分で動かしてみる。

② [車いすの問題点を確認する]

(ア) 段差を超える

* 5センチ程度の段差

(イ) スロープ、坂道を登る、降りる（角度の緩いもの）

(ウ) どのような問題があるか考えよう。

・段差は越えられないもしくは、越えるのが難しい。
（環境の整備の必要性）

・どのような車いすがあるとよいか考える。（新たな福祉用具の開発）

・介護者にできないところを助けてもらう。

（介助をされることのつらさ（勝手に動かされる等）を理解してほしい。

* 「歩けないことを体験しよう」 6)－② 質問事項参照

* 「歩けない」とき、車いすしかないのか？

体験できれば、杖、歩行車等が体験でき、「歩けない」＝車いすでないことも、理解していただければと考えている。

4) 実行する際の留意点

[車いすをこぐ：平面]

①車いすは、遊び道具ではないので、決して遊びにならないよう注意するとともに、実施にあたり、転倒、衝突がないよう注意する。

②車いすの基本的メンテナンス（タイヤの空気圧、ブレーキの利き）を確認する。

③車いすに乗るときの手順を指導する。

・ブレーキがかかっているか。

・乗るときステップを起こしているか。

・イスからどのように、車いすに乗り移るか考える。（車いすの機能）

④本来車いすは身体の大きさなどに合わせる必要がありますが、ここでは調節できないので、合わない状態で使用しています。このことが色々な場面で影響してくることが予想されます。

例えば大きすぎてこぎにくい、足が浮いてしまう、など。

1) 目的

同じ「歩けない」といっても、身体状況により、同じ福祉

用具でもその機能性は、大いに変化することを体験し理解することを目的とします。

2) 準備する教材

- ①車いす（標準型 調整機能付き・できれば身体にあったもの）
- ②クッション
- ③障害物や段差になるもの（スロープ、運動マット、コーンなど）

3) 手順

①片手片足で車いすを動かしてみる

- *片手は、アームレストに乗せておく。
- *片足は、フットレストに乗せておく。
- ・平面をまっすぐ進む
- ・回転する
- ・バックをする
- ・段差を越えてみる

②障壁をクリアする介助方法を確認する

(ア) スロープの昇降

- ・車いすの特徴を説明する。
 - *車いすは前方に傾いた場合、乗車している方を支えられない。
 - そのため、高いところから低いところへ降りるときには基本的に後ろ向きで降りる。
 - *必ず介助するときは、声をかけることを忘れずに。
- ・ハンドルを確認する。
- ・車いすを押して登る。
- ・車いすを支えて降りる。

(イ) 段差を越える

- ・キャスター上げの方法
 - *キャスターを持ち上げるには、ティッピング・レバー、グリップを下に押すのではなく、グリップを手前に引くことを指導する。
 - *深くきちんと座ることで、キャスターをあげることは容易になる。
 - *段差を越えるポイントを説明する。
 - 1) フットレストの足が障害物に当たらないように注意し、キャスターを上げる。
 - 2) 車いすのバランスが良いところまで、キャス

ターを上げる。

3) 後輪が両輪とも段差に接するまで前進する。

4) 後輪が両輪とも段差に接したところで、前輪キャストを降ろす。

5) 後輪が接した状態で、斜め前方に押し上げる。

*降りるときは、この逆を行う。

③介助してもらった感想を話し合う。

・介護される怖さ、不安等

4) 実行する際の留意点

[車いすの問題点を確認する]

①段差を越えるとき、後方に転倒しないように注意する。

②スロープの登り、降りでスピードに注意する。

③問題点の整理で、「環境の整備の必要性」「新たな福祉用具の開発」「介助されることの意味を考えてもらう」

[障害の違いを確認する]

①「歩けない」状況が変化することで、同じ福祉用具でもその機能性は大いに変化することを理解してもらう。

②手でこぐだけが車いすの使い方ではないことを理解してもらう。

[障壁をクリアする介助方法を確認する]

①介助の基本である、相手の思いを理解する。

②車いすの特徴を理解し、安全な介助の仕方を身につけてもらう。

3. 目が見えない体験と福祉用具

<はじめに>

人間が収集する情報の約80%は、視覚情報が占めています。視覚を失った方達は、不足する情報を補うために他の感覚機能（触覚・聴覚・臭覚・味覚）を最大限に活用し、自立した生活ができるよう頑張っています。多くの方は生活の不自由さをできるだけ軽減するためにさまざまな福祉用具を生活の中で欠かせない道具として上手に活用していることを理解いたしましょう。

●パンフレットP14 ⇒

① [目が見えないことを体験しよう]

1) 目的

視覚障害者を理解していただくために、「目が見えない」という障害を体験させます。その中で視覚障害の方にもたくさんの可能性があり、私たちと同じように普通の生活ができることを知らせます。さらに見えない状態で、ひとりで歩く怖さ、不便さを体験することで、どうしたらひとりで歩けるようになるのか、また、安心して歩くためにはどのような用具や周りの援助が必要になるのかを考えさせます。

2) 準備する教材など

- ①アイマスク（タオルなどで代用してもよい）
- ②段差、障害物（運動マット、ダンボールなど）
- ③机

3) 手順

- ①6人～8人のグループを構成し二人一組のペア（A， B）で交代して体験をする。
- ②移動体験として、平地のコースをAがアイマスクをつけてひとりで歩いてみます。
 - ・ Bは危険のないように注意して見守ります。
 - ・途中で指導者などが手を叩く、楽器を叩くなどして音を出してみます。（ミカンやバナナなど匂いのあるものを確認させても良い。）
 - ・次に運動マットや障害物(机)などを置いたコース作ります。
 - ・Bが言葉で誘導を行い、Aにマットの上や障害物などの間を歩いてもらいます。
 - *視覚障害の方が、生活をする場合に残された感覚のどこの部分をより多く使って自立されているかを感じてもらう体験です。

4) 実行する際の留意点

①アイマスクを装着して歩行するとき、危険のないようにしっかり見守り注意をする。会場も安全性を留意する。また、交代をして体験を行うとき、混乱のないように考慮しておく。

②視覚障害者の方は、視覚は無いが残された感覚を十分に使って生活していることを理解させる。特に音声による情報は、手軽で有効な手段であるため、言葉による情報提供は大切であることを指導する。

③言葉で誘導する場合は、前もって注意事項を与えないで、体験後にそれぞれに考える作業をさせる。

*言葉による情報提供の注意点として、話し方は「あれ」「これ」などのあいまいな言葉を使わないようにして、「右」「左」「前」「後ろ」「何センチの段差があります。」など具体的に情報を与えるように指導を行ってください。

④ひとりで安心して歩くためには、用具が必要になることを理解させる。たとえば、白杖や音声情報に変えて知らせてくれる用具など。(次の単元で体験を行います。)

● パンフレットP16 ⇒

②^{はくじょう}[白杖を体験しよう]

1) 目的

白杖には、①歩行先の情報をキャッチする、②安全を確保する、③周囲に視覚障害があることを伝える、の3つの大きな役目を持っています。視覚障害の方がこの白杖を巧みに操作することで、ひとりでより安全に歩けるようになることを理解させます。しかし、町の中に出たとき、不便に思うこともたくさんあります。それは、どんなところなのかを体験を通して理解させ、どうすれば不便な部分を少しでも解決できるかを考えていただきます。

1) 準備する教材

- ①アイマスク
- ②白杖（直杖、折りたたみ杖など）
- ③障害物や段差（運動マット、机）

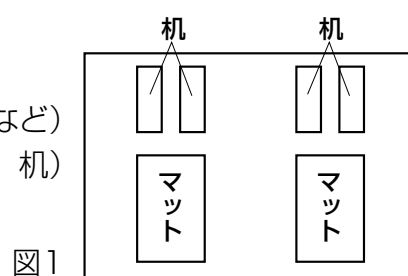


図1

3) 手順

- ①二人一組のペア（A， B）のグループを構成する。交代で体験をさせる。
- ②平地に運動マットや人が2人通れるスペースを開けて、机2台を並べコースをつくる。（図1）
- ③Aは、白杖を持って段差の確認、マットの感触、障害物（机）の確認をしながらコースを歩いてみる。このときBは、危険のないように見守りを行う。
- ④白杖を使って歩いてみてどうだったか話し合いをする。その後発表を行う。

4) 実行する際の留意点

- ①コースを歩くとき、マットの段差で転倒や机の間の通行の際の障害物との接触など危険のないように見守りを行い、また間違った白杖の使い方をしないように指導を行う。

- ②白杖の基本操作の指導を行って体験を行う。

（白杖の基本操作）

まず杖を体の前方中心に構え、肩幅より少し広いくらいの幅で、杖先が地面をなでるように左右に振ります。

- ③「白杖の役割」について話し合いの後に発表をしていただきます。

（白杖の役割）

1. アンテナの役割 ……路面の危険な部分だけでなく歩行にとって役に立つ情報を伝えてくれます。
（たとえば点字誘導ブロックなど）
2. 車のバンパーと ……路上の障害物から身を守って安全しての役割 ……の確保ができます。
3. シンボルとして ……周囲の人々に視覚障害があることの役割 ……を知らせ注意を促してくれます。

*視覚障害は一般的に盲と弱視とに分類されます。弱視の方は見え方、見えにくさが個々に違います。ときには周りの人から健常者と間違えられてしまいます。白杖を持つほうが場合によっては、視覚障害のある方だと周知してもらって安心なこともあります。

以上のことを知っていただき、白杖を使う意義を理解させます。

④ひとりで社会に出たとき、たとえ白杖を持って歩いても不便な部分が出てきます。より安心して歩くためには、人の手引による歩行（ガイドヘルプ）や盲導犬による歩行があります。また「点字誘導ブロック」の整備も大切であることを学習させます。

（点字誘導ブロックの意味）

- ・線状ブロック（誘導ブロック）は進む方向を知らせます。
- ・点状ブロック（警告ブロック）は止まれや注意などのブロックです。

⑤視覚障害の方に援助を行うときの注意点として、私たちが勝手に判断して援助をすることのないように、手助けがいるのかどうか確認をとって、またどういう手助けが必要なのかを知った上で手助けを行います。

●パンフレットP18 ⇒

③ [その他の福祉用具を体験しよう]

1) 目的

視覚障害の方が生活の中で困っている部分を、福祉用具を使用することで自立した生活が出来ることや、その人らしく生活ができるためにたくさんの福祉用具があり、いろいろな工夫がされていることを学習する目的とします。

2) 準備する物品

- ①アイマスク
- ②触読式時計^{しよくどくしき}
- ③点字盤
- ④用紙、筆記用具
- ⑤体験用の点字カード

3) 手順

- ①4～6人のグループを構成します。（交代して体験を行います。）
- ②（体験1）
 - ・グループの一人がアイマスクをつけて「触読式時計」に触れて、時刻を調べてみる。
- ③（体験2）
 - ・「点字の五十音」について指導を行います。
 - ・はじめに、アイマスクをつけずに「点字のあいうえお」を読んでみます。

(点字盤で「五十音」を書いたり、黒丸で「五十音」を書いてみるのも学習として面白い。)

- ・次にアイマスクをつけて「いえ」「あお」「うえ」「あい」などの点字カードを作って体験者に触れて読んでもらいます。

【点字の五十音について】

- ・「点字の五十音」は、母音と子音の組み立てで、ある決まった約束で作られています。
- ・(点字の読み方と書き方)
点字は、6つの点を使って表します。すべて横書きです。
読むときは、凸面を左から右へ読みます。
点字器で書くときは、右から左に書きます。(タイプライター、パソコンなど用具によっては左から書くものもあります。)

④最後にグループ毎に、体験の感想を話し合ってもらいます。

4) 実行する際の留意点

①視覚障害から生じた不便なことを補うために音声での情報が大切になるが、雑音の多い環境では、情報が伝わりにくい。このような場合、触覚を使う用具の方がより情報が得やすい。ただ「触読式時計」は一般的な時計と違って私たちには、なじんでいないため読み取りにくい。体験しにくいかもしれませんが、視覚障害のある方は訓練や使い込むことで容易にしていることを指導します。

②点字を読むという(体験2)は「点字」の知識が必要です。体験で使用されたカードは、簡単な2文字ですが、触れて読むという難しさを感じさせます。

点字を読める視覚障害の方は、約1割(約2万人)程度と言われています。触れて読むことは、大変難しいことですが、触れる感覚を磨くためにも点字を読む訓練が必要とされています。そこで、私たちは点字の書き方を知ることによって「点字を書く」という援助ができます。社会のみんなが障害を持った人に応援できることを考え、助け合うことの大切さを知っていただきたい。

③私たちは情報の約8割を視覚から得ています。その視覚が失われた場合、それに変わる感覚として、聴覚や触覚を使って情報が得られる福祉用具が必要になることや、その

ような感覚の情報を変換できる多くの用具が開発されていることを理解させます。また、その他の用具を調べて、どんな工夫があるのか考えさせる体験も面白い。

参考文献

1. 「ガイドヘルパー養成研修テキスト」
中央法規出版, 2003年.
2. 「介護福祉士養成講座 14巻 形態別介護技術」
中央法規出版, 2003年.
3. 「白杖」 千葉県立千葉盲学校
<http://www.chiba-c.ed.jp/chiba-sb/sienhin/n-sien1.html>
4. 「視覚障害者のために」 北海道・障害者保健福祉課
<http://www.pref.hokkaido.jp/hfukusi/hf-shfks/syofuku/modoken/sikaku.htm>
5. 「白杖の基礎知識・白杖の歩行の方法」
静岡光の家みんなの広場
<http://www.geocities.jp/sizupika/hakujyou/knowledge.htm>
6. 「点字の五十音 読み方 書き方」
<http://www.e-nakama.jp/tenji-kun/yomi.htm>

協 力

1. 福岡県立北九州盲学校

4. 「コミュニケーションが取れない体験と福祉用具」

<はじめに>

コミュニケーションとは何でしょうか？言葉を使って話をする事？もちろんこれもコミュニケーションの方法の一つです。でも言葉が通じなかったり、何を話しているか理解できなかったりしたらコミュニケーションはできないのでしょうか？いいえそうではなく、コミュニケーションとは自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを理解したりすることなのです。人と会話する、電話をかける、手紙を書く、本を読む、テレビを見るといった当たり前のことができなくなったら、いろいろな方法でコミュニケーションをとることを考えます。

そのひとつが福祉用具を利用することです。コミュニケーションとは「人と人をつなぐかけ橋」であることを知りましょう。

● パンフレットP20 ⇒

① 【コミュニケーションが取れないことを体験しよう】

1) 目的

自分の考えていることを相手に伝えることや、相手の気持ちを知ることの困難さや大切さを、簡単な体験を通して考えてみます。

2) 準備する教材

・特になし

3) 手順

相手の問いかけに対して、「はい」、「いいえ」という“サインで伝えるゲーム”をしましょう。

①2人で1組のペアを作ります。

②1人はお話役、もう一人は聞き取り役として役割を決めます。

③それぞれの役割にはルールがあります。お話役は言葉を発して会話をしてはいけません。ですから、聞き取り役の問いかけに答えるために“そうだと思う”の合図（「はい」の合図）と、“そう思わない”の合図（「いいえ」の合図）を決めてください。

④聞き取り役は言葉を発することができ、お話役に質問をすることができます。

⑤お話役は聞き取り役に伝えたい言葉を思い浮かべます。食べ物、好きな言葉、名前などなんでも構いません。

⑥聞き取り役はお話役に質問をして、伝えたいと思っている言葉を聞き出してください。

⑦聞き取り役がうまく聞き出すコツは、「はい」「いいえ」の合図で答えやすい質問をすることです。

4) 実行する際の注意点

- ①二人一組ではなくても4、5人のグループで行なったり、クラス全体で行なってもかまわない。これらの場合は一人がお話役となり、その他の人が聞き取り役になります。
- ②聞き取りが難しいようであれば、伝えたい言葉を食べ物、名前、教室にあるものなどに限定しても良い。
- ③お話役の「はい」、「いいえ」の合図は、言葉を発する方法以外であれば何でもかまわない。例えば首を振る、手を挙げる、指先を動かす、瞬きをするなどの方法を、それぞれのグループで決めてください。
- ④体験方法は聞き取り役の質問数を限定して行なうよりも、体験時間を決めて、その時間内に聞き出すことができるかどうかとした方が良い。
- ⑤役割を交代して行ない、お話役・聞き取り役の両方の立場を体験することが望ましい。
- ⑥言葉を発しないで合図のみとしたルールにおいても、実は顔の表情や、合図を送るタイミングや間などが無意識のうちに伝達手段として役立っており、コミュニケーションは会話以外の方法でも行っていることを理解させる。
- ⑦この体験を行なった後には質問用紙にある項目を参考にし、必ず話し合う時間を持ち、ゲームを行っている時に感じた気持ちを大切にすること。

● パンフレットP22 ⇒

②【文字盤の体験をしよう】

1) 目的

言葉を発声することが困難で文字を書いて伝えることも困難な人が使う用具の例として、文字盤があります。文字盤を使って会話する方法を知ること、コミュニケーションを助ける福祉用具を理解します。

2) 準備する教材

- ・文字盤（A4サイズ程度の厚紙に50音を書いて作成してください）

3) 手順

文字盤を使って会話体験をしてみましょう。

- ①2人で1組のペアを作ります。
- ②ペアのうちの片方は文字盤を使う役とします。

③文字盤を使う役の人は言葉を発して会話をしてはいけません。ですから会話する時は文字盤上の文字を、順番に指で指し示して文章をつづっていきます。ただし、「はい」、「いいえ」を答える時は、首を振ったり、手を挙げたりなどの合図をしてもかまいません。

4) 実行する際の注意点

- ①「昨日見たテレビの話」、「最近あった面白かったこと」などの会話する話題を設定するか、話題提供してから始めると体験しやすい。
- ②役割を交代して行ない、両方の立場を体験することが望ましい。
- ③文字盤を利用した会話においても、顔の表情や会話の間などがコミュニケーションに影響していることを理解させる。
- ④文字盤を使った会話は少人数間での利用には向くが、多人数には向かないこと、文字盤利用者から情報発信すること（声をかける、会話を切り出す等）は困難で、受身的な会話になりがちになること等の文字盤利用の限界も理解させる。
- ⑤どんな文字盤を作るとうまくできるかについても話し合うと良い。（例：よく使う言葉や名前や固有名詞も文字盤上に書いておくなど）
- ⑥操作部のボタン等を押すことによって言葉を発声する福祉用具がある（音声出力会話補助装置）。これらの用具が用意できれば、文字盤と同じ方法で体験すると良い。そして、文字盤と言葉を発声する用具との違いについて話し合ってみることが望ましい。（例：音声が出るので声かけや会話を切り出すことができる、文字表示部があるので長い言葉でも目で見て確認できるなど）

5. 〔手・腕が動かない体験と福祉用具・製作〕

<はじめに>

私たちは毎日さまざまな道具を利用しています。食事のときはお箸や、スプーン、フォークなどを使い、調理には包丁やまな板などを使います。皆さんが勉強をするときには鉛筆や下じきを使いますよね。すべて生活する上でなくてはならない道具ばかりです。

しかし、なんらかの障害があると、食事をしたり、服を着替えたりなど、私たちが毎日していることでも困難になることがあります。でも、自分に合った道具を使うことで、できなかったことができるようになったり、今まで以上に便利になったりすることがあります。特に自分ですることを助ける道具を「**自助具**」と言います。今ではたくさんの自助具が市販されています。また、身近にある材料を使ってちょっとした工夫や手を加えることによって、便利な自助具を作る事もできます。普段見慣れている道具でもよく見てみると、実はとても便利な道具があるのです。さまざまな体験や観察を通して、自助具や便利な生活道具を知りましょう。

● パンフレットP24 ⇒

① 〔はしが使いづらくなる体験をしよう〕

1) 目的

なんらかの障害があると、私たちが毎日していることでも困難になることがあります。その一つの例としては“箸を使って食事すること”があります。どんな点が困難になると思うか体験を通して考えてみます。

2) 準備する教材

- ・ 一般に市販されている箸 1膳
- ・ 大豆等の豆 適当量
- ・ 小皿 2つ

3) 手順

- ① テーブルの上に大豆を適量入れた皿と空の皿を並べます。
- ② いつも食事する時の手と反対の手で箸を持ちます。
- ③ 合図に従って箸で豆をつまみ、もう一方の空の皿に移しましょう。そして、30秒間で何個つかめたかを数えてみましょう。

4) 実行する際の注意点

- ①簡単に疑似体験するために利き手と反対の手で体験する。手の感覚を鈍くするために、軍手などをはめて体験しても良い。
- ②箸は割り箸でも良い。
- ③単に豆をつまむだけでなく、一定時間で何個つまめるか数えたり、複数人数で競ってみたりなどのゲーム性を持たせて体験しても良い。

②【食事用の自助具を体験しよう】

1) 目的

自助具の箸の使い比べを体験し、さまざまな工夫がされた自助具を利用することで、あきらめることなく使い続けるができることを理解します。

2) 準備する教材

- ・一般に市販されている箸 1膳
- ・自助具の箸 3種類程度
例：はさめーる（大和合成（株）製）、箸蔵くんL型、箸蔵ストレート型（ウィンド〜風〜製）、バネ付き箸（コラボ（株）製）
- ・大豆等の豆 適当量
- ・小皿 2つ

3) 手順

- ①テーブルの上に通常の箸と自助具の箸を並べ、その前に大豆を適量入れた皿と空の皿を並べます。
- ②いつも食事する時の手と反対の手で箸を持ちます。
- ③合図に従って箸で豆をつまみ、もう一方の空の皿に移しましょう。そして、30秒間で何個つかめたかを数えてみましょう。
- ④別の箸を使って同じようにやってみましょう。

4) 実行する際の注意点

- ①簡単に疑似体験する例として、利き手と反対の手で体験する。手の感覚を鈍くするために、軍手などをはめて体験しても良い。
- ②単に豆を摘むだけでなく、一定時間で何個つまめるか数えたり、複数人数で競ってみたりなどのゲーム性を持たせて体験しても良い。

- ③それぞれの自助具を体験した後に、(1) 特徴、(2) 使いやすいと思ったところ、(3) どんな人に使いやすいと思うか(例：手の細かい動きが困難な人、指先の力が弱い人、箸そのものをうまく持てない人、口元まで食べ物を運ぶのが困難な人など)、(4) さらに工夫できるところ等をグループで話し合ってみよう。

③【簡単な自助具の製作体験】～リーチャーを作ってみよう～

1) 目的

手や腕を伸ばすことが難しかったり、車いすで生活したりしていると、どうしても生活上困難になることがあります。それらを補助する自助具として、“リーチャー”というものがあります。市販もされていますが、簡単なものであれば身近にある材料を使って製作することができます。実際に製作し、どんな人がどんな時に便利か考えてみましょう。

2) 準備する教材

針金製のハンガー(例：クリーニング屋などでもらえるもの) 1つ

3) 手順(製作の方法)

- ①ハンガーの三角の部分を広げて棒状に伸ばす。
- ②伸ばして棒状にしたハンガーの両端を持ち、半回転ひねる。

4) 実行する際の注意点

- ①さまざま意見交換ができるようにグループを作って話し合う。
- ②利用方法や対象となる人等については、「車いすに乗ったままカーテンを閉めるときに便利」等、できるだけ具体的な意見を出し合う。
- ③工夫する点については、「磁石を先端に付ければクリップやホッチキスで閉じた紙が拾いやすい」、「握りを太くすればもっと持ちやすくなる」等を考えてみる。材料があれば実際にやってみる。

④【簡単な自助具の製作体験】～便利なタオルを作ってみよう～

1) 目的

顔やぬれた髪の毛を拭く、身体を洗うなどタオルを使う場面

は日常生活では多く見られます。しかし手や腕の動きが悪かったり、力が弱かったりすると、それも困難になることがあります。どこにでもあるタオルを使って便利な工夫をしてみましょう。そして、どんな人がどんな時に便利になるか考えてみましょう。

2) 準備する教材

- ・スポーツタオルなどの長めのタオル 1枚

3) 手順（製作の方法）

- ・タオルの長い辺を半分に折り、その両端を縫い付ける。

4) 実行する際の注意点

①このタオルの工夫のポイントは、両端が袋状になっているため、握らなくても扱うことができることであるから、片手をグーにして、もう片方の手のみを動かしながら背中を拭いてみたり、両手をグーにして頭や髪の毛を拭いてみたりしてみる。

②利用方法や対象となる人などについては、できるだけ具体的な場面を設定し、グループで話し合うとよい。

● パンフレットP32 ⇒

● パンフレットP38 ⇒

6.福祉用具いろいろ（パンフレット参照）

まとめ（パンフレット参照）

福祉用具体験学習パンフレット『福祉用具を体験しよう』 指導要領

発行日：2005年3月

発行者：財団法人テクノエイド協会

〒162-0823

東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ4階

TEL 03-3266-6880 FAX 03-3266-6885

この事業は、独立行政法人福祉医療機構（長寿社会福祉基金）の助成により行ったものです。

TECHNO^o
AIDS